

に変革をもたらしたと聞いています。それが在研究室とだるまの活動の原点になっています。

【2】阪神淡路大震災とのつながり

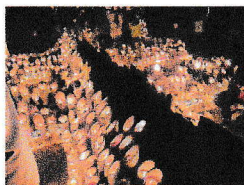
① ただちに神戸へ すべてが「衝撃」

「だるま」発足の翌年1月、阪神淡路大震災からすでに10年以上経過していましたが、第1回目の1.17のつどいへの参加が決まり、以降コロナ禍を除きほとんど毎年参加しています。

② 慰霊祭「1.17のつどい」に参加！

毎年、まだうす暗く肌寒い早朝、神戸市役所の南側の東遊園地に心に深い傷が残る参加者が黙々と参集して来ます。

震災の発災時5時46分に黙祷！
悲しみを共有します。



神戸市の主催行事の後、兵庫県主催の行事が「人と防災未来センター」前の広場で開催されています。

人と防災未来センター：阪神淡路大震災の経験を語り継ぎ、その教訓を未来に活かすために出来ました。神戸を訪れる機会がありましたら一度は見学してください。(有料)5階には資料室(無料)があります。

③ 松山順三氏との初めての出会いと交流

松山氏は阪神淡路大震災当時神戸市の職員として中規模の避難所運営を直接担当。生々しい現場のお話を聞くことができました。第1回目の養成講座の3日目に講演していただきました。以降度々交流していただいています。

④ 訪れた施設等(神戸市付近)

阪神淡路大震災を多角的に知るための

様々な施設があります。機会がありましたら訪れていただきたい場所です。

- ・北淡震災記念公園(淡路島)
- ・E・ディフェンス(三木市・要予約)
- ・神戸港震災メモリアルパーク。みなとのもりの公園(神戸市中央区)
- ・阪神高速の震災資料保管庫(神戸市)
- ・仁川地すべり資料館(西宮市)
- ・神戸市・神戸大学附属図書館 等参照

⑤ 神戸との交流を続ける

1.17のつどい参加には強い印象を受け、毎年報告会を開催し、現状と変化を共有してきました。会員には親類を亡くした方もおり、当然参加し学ぶことが多かった。その後、ほとんど毎年、何人かの会員が訪れ、周辺施設、終了後に神戸市役所の展望室から式典会場を見たり、神戸市役所防災展示室、人と防災未来センター、その後各自の調査場所、例えば広島市の土砂災害現場、岡山県の被災現場を訪れています。

特に、元神戸市職員の松山順三氏には毎年お会いして神戸の震災体験と変化を聞いたり、講演を神奈川で行いました。芦屋市役所の今石佳太氏にもお世話になりました。経験のない我々からの質問攻めに閉口したのではと、いつも心の中でお礼を申し上げていました。

⑥ 元神戸鷹取中学校校長の近藤豊宣氏の講演 「人々を救ったのは、人の心」は避難



所開設と運営について、最大5000人の大混乱の中で子どもたちが物資の配布を守り抜いたり、アイデアを活かした教師の活動、地域の人

たちの活動など生々しい100日間の現実が語られ、心の底に記憶しておく内容でした。

【3】東日本大震災の現場調査

① 発災直後の活動ま

発災直後には、会員で岩手県山田町出身の佐々木さん(横浜市緑区)から提案があ

り、荏本教授の東北現地調査が実現しました。経過は寄稿に報告されています。

東北から帰った後、早速、荏本教授は神奈川大学横浜キャンパスで5月13日に講演会、平塚キャンパスでは5月21日に講演会が行われました。

だるまのメンバーは色々の支援活動をしており、会員の森さんの「ボランティアバス」、高松さんの福島支援の会員が各々東北の被災地支援に入りました。

② 震災後の活動

荏本先生中心に杉原さん、森さんや植山さん等会員による講演やシンポジウム、研修会が行われ、参加しました。だるま会員が参加する防災ギャザリングかながわでは、体験フェアや講演会が行われました。

談義の会では、シンポジウム、会員の上原さんや中川さんに講演を依頼したり、情報通信分野、警察、鉄道、地震保険等各界のゲストをお招きし、出来る限りの実情報告をして頂きました。その後も、震災の現地報告が定期的に行われています。

③ 第1回東日本の被災地へ

東北訪問「被災地へ」が2012年3月13日～16日、22名が参加し行われました。

(ルート) 岩手県復興局—宮古—普代村—田老—宮古—山田町—大槌—釜石—南三陸—大船渡—陸前高田—伊仙沼—石巻—名取—関上—仙台、岩手県から宮城県まで縦断しました。

現場は1年経っても山積みのがれき、壊れた家屋、街そのものが焼失しており、まちの復興も見えませんでした。避難所運営は避難した人たちの手で協力し合った事例を学びました。現地で交流して多くの事実を知りました。

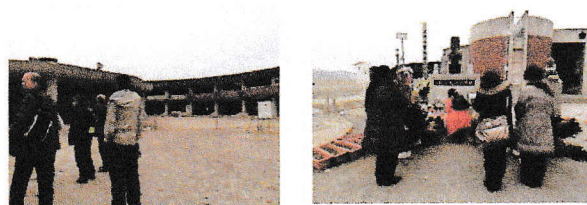
④ 第2回 女川町、石巻市へ

「被災地の今と声を地域に伝えよう」

2013年3月24日～26日、21名が参加し、2回目には石巻市、女川町調査が行われました。

(ルート) 石巻—女川復興祭—雄勝町—

大川小学校—エルファロ(トレーラーハウス宿泊)—民家横の避難生活現場—女川—女川町立病院—きぼうの鐘商店街—石巻氏日和山公園—門脇小学校—石巻社会福祉協議会—石巻日日新聞—石巻駅「釜石の奇跡」「大川小の悲劇」では学校防災の難かしさを見せつけられました。



気仙沼では津波の高さは当初2mだったが6mさらに10mと大きくなり、避難した神社横の自治会紫会館での避難生活のお話を聞きました。隣のお寺さんも利用、名簿を作り120



名が5か月間過ごしました。町中には復興商店街ができていました。

⑤ 第3回「山田町5年目の今！」

2016年にも14人が調査しました。岩手大学と山田町での交流、浦辺利広さんによる現地案内と大槌町勤務の渡辺善明さんの案内でした。余談ですが浦辺邸の裏で親子の熊に出会い、びっくりしました。海の見えない防潮堤、語り部ガイド、大槌町のかさ上げ、堤防で被害のあった田老も訪問しました。田老では明治29年、昭和8年、平成23年と津波被害があり、最大波高15m、10m、16m、被災戸数336戸、505戸、1691戸でしたが死者不明は1,858人、911人、181人と大幅に減っていました。高所の居住地は出来ていましたが、復旧工事はこれからでした。

⑥ 「佐藤教授の調査報告」

経済学者の立場で東北被災都市の調査の結果を報告くださいました。ドローン空撮による復興状況報告が定期的に行われ、震災復興をどう見るか、防波堤の効果は限定的等の報告がありました。談義の会での10

周年の報告では、海の見えない防潮堤と広大な空き地に点在する家屋の風景が印象的でした。



【4】中越地域防災交流会に参加

① 2010年3月、中越防災安全機構、中越市民安全士会と防災塾・だるま（22名が参加）および川崎災害ボランティアネットワークが小地谷市との交流、意見交換をしました。

② 翌年も「防災グリーンツーリズム」全体交流会に50名の参加があり、だるまからも数名が参加しました。

【5】広島・岡山の風水害現場の視察

2014年8月19日夜から20日明け方にかけて、広島市安佐南区八木地区で発生した大規模な土石流現場を調査しました。

3時間降水量は200ミリを超え、同時多発的に大規模な土石流となりました。

次の現場調査では、2018年7月、西日本豪雨が発生した地域の視察をおこないま



した。「バックビルディング」すなわち大雨をもたらす線状降水帯が長時間停滞し、がけ崩れ、土石流、地滑りの激甚災害が発生、15県にわたり200名以上の犠牲者が出



て、60歳以上の避難は1万人以上に達した。倉敷では小田川が背水現象（バックウォーター）で8か所の堤防が決壊、浸水2300戸、4mの水で51人が犠牲になっ

た現場でした。

【6】関東大震災90周年の報告記録

① 「関東大震災 よこはまの災害とまち歩き」2015年6月副題 ～貿易商・プール氏の災害逃避行ルートをとる～

土砂災害専門家の井上公夫氏による当時の県内の土砂災害の跡会員の相原延光さんによる解説後、現地見学が行われました。

横浜の市街地は地震で倒壊するとともに台地の急崖部も崩壊、各地の出火で焼死者が出ました。当時の山下町の様子、地割れの写真、液状化による元町百段公園の表層地すべり、港の見える丘公園の断面、地質図の案内があった。

津波の高さ50cmから80cmの推定、余震などの様子を説明いただきました。

② 「関東大震災を記録した人々」談義の会 101回、～関東大震災から90年～

横浜開港資料館吉田律人氏から、貴重な資料映像や記録が残されている報告がされました。治安が悪化、混乱と根拠のない情報の拡大などの過程も聞きました。1919年には埋め立て地の大火で、煙が避難民を襲い、一酸化炭素中毒による多数の死者を出したことが報告されています。

③ 「関東大震災直後の横浜の小学校」談義の会 100回記念 横浜市資料室松本洋幸氏の講演 ～横浜の事例から 小学校と教職員の行動・貢献～ 2013年

横浜市市立小学校は甚大な被害状況が報告されました。54,962名中903名死亡(1.6%)。避難所としては約20校、避難者としては約6千人。教職員は地域の中核として、調査、記録、応急対応、負傷者の手当て、救援物資の運搬分配、道路整理、夜警、民心対応に当たりました。